

デッサン教室でヌードモデルになって  
中出しされちゃう金欠カントボーイ①

「金が、ない!!」

狭いワンルームアパートで、俺、杉浦涼太（すぎうらりょうた）はスマホを放り出して天を仰いだ。

大学生というのは、どうしても金が飛んでいくんだろう。長年野球部で鍛えてきたこの体があるから、引越しのバイトをこなしてはいるが、それでも追いつかない。

俺には、普通の男とは違う事情がある。……そう、俺は『カントボーイ』だ。この身体特有の悩みやケアにかかる費用だって馬鹿にならない。この際、カントボーイだからこそ稼げるバイトはないか!?

なんて都合のいい話……。

「……あったわ」

静かに手を挙げた。

「せっかくの貴重な機会ですので、性器をはっきりデッサンしたいのですが」

「ああ、そうですね」

渡さんは俺の方を振り返り、優しく微笑みながら指示を出した。

「次は膝を立てて足を大きく開きましょうか。手は後ろについて身体を支えてください」

「えっ……あのっ、これは……」

言われるままにポーズを取ろうとして、俺は思わず動きを止めた。いわゆる、M字開脚だ。流石にこれは恥ずかしすぎて、一瞬で顔が熱くなる。

「大丈夫。君の身体は、どこから見ても綺麗ですよ。……さあ、お仕事ですからね。自信を持って、大きく開いて見せてください」

「は、はい……っ」

そうだ、これは仕事なんだ。お金をもらう以上、俺に拒否権なんてない。俺は羞恥心でプルプル震える脚を大きく左右に割り、大勢の男性を前に、自分の股間を真っ向から晒す。野球部で鍛えた太腿の筋肉が、緊張でピクピクと跳ねた。

すると、あちこちから「おお……」と感嘆の声が漏れる。

「素晴らしい。ありがとうございます。これでじっくりデッサンできます」

「いえ……っ」

初老の男性に悪意のない顔でお礼を言われ、自分だけが性的なことを考えているみたいで恥ずかしくなる。

余計なことを考えないように必死にポーズを維持して耐えていたけれど、デッサンが再開されてすぐに、また別の生徒さんが申し訳なさそうに手を挙げた。

「すみません。モデルさんのアンダーヘアで性器が見えづらいのですが……」

(え……っ)

「確かに、これでは神秘的な造形が隠れてしまいますね。せっかくの機会ですから、一番美しい状態を描いていただきましょう」

渡さんはそう言うと、こともなげにスラックスのポケットから電気シェーバーを取り出した。なぜそんなものを持ち歩いているのか、問う暇もなかった。渡さんは俺の背後に回り込み、太腿をぐいと広げさせると、震える股間に冷たいシェーバーの刃を当てた。

「あっ、ちょ……っ、渡さん!？」

「じっとしててくださいね。怪我をさせてはいけませんので」

ヴーン、ジョリ、ジョリ……。という無機質な振動音が、静まり返った教室に響く。男たちの視線が集中する中、つるりとした生肌が露わになっていく。

「今どき、VIO 脱毛も流行っていますから。何も恥ずかしいことではありませんよ」

(そんなわけあるか……!こんな、大勢の前でっ……!)

「先生、ありがとうございます。これでめちゃくちゃよく見えます!」

生徒の満足げな声が聞こえる頃には、俺の股間はあっという間にツルツルの、赤子みたいなパイパンに変えられていた。今まで毛に隠れていたクリトリスも、柔らかな陰唇も、全部が丸見えになってしまった。

(恥ずかしい。なんで俺、こんなこと……っ)

情けなさや羞恥心で泣きそうになっていると、渡さんの指がそっと股間に伸びてきた。

「剃り残しや、チクチクするところはありませんか？」

渡さんが確認するように、剥き出しになったそこを指先でゆっくり往復する。すると不意に、指先がぷっくり膨らんだクリトリスを微かに押しつぶした。

にゅくっ♡

「ンんっ……♡♡だ、大丈夫、です……」

ただ確認されただけなのに、強い刺激に思わず甘い悲鳴が漏れ出てしまった。気のせいか、アトリエの温度が一段階上がった気がする。

「……さて、ヘアがなくなったことで、筋肉のラインと繊細な造形がより鮮明になりましたね」

渡さんは満足げに頷くと、今度は備え付けの棚から小さな遮光瓶を手を取った。嫌な予感がして、俺は思わず太腿に力が入る。

「ですが、少し陰影が弱いですね。もっと肉体の凹凸を強調して、描きやすくしましょう。……全身にオイルを塗らせてくださいね。肌を保湿する効果もありますから」

「えっ、オイル……ですか？」

戸惑う俺をよそに、渡さんは手のひらにたっぷりと透明なオイルを垂らした。アトリエに、どこか甘ったるい、嗅いだこともないような花の香りが広がる。

「あ……っ」

大きな手が、鎖骨から胸元にかけて、滑らせるように俺の身体を愛で始めた。大胸筋や腹筋が、オイルの光沢を纏ってテカテカと輝き出す。

くりくり……ピンっ♡♡

「ひゃうんっ……!？」

オイルが塗り込められていく様子をぼうっと目で追っていたら、不意に、指先で乳輪を囲むように弄られ、親指と人差し指でツン♡と乳首を捏ねられた。弾けるような衝撃が脳まで突き抜け、その衝撃に思わず情けない声が出た。

「……痛かったですか？すみません。ここは乾燥しやすい場所ですから、念入りに塗り込んでおきますね」

渡さんは申し訳なさそうな顔をしながらも、指先の手は止めない。それどころか、たつぷりとオイルを含ませた指で、硬くなり始めた突起をにゅく♡にゅく♡と、これでもかというほど丁寧に捏ね回してきた。

「あ、っ……や、め……っ」

ピンっ♡♡

「〜〜っ!!!♡♡♡」

仕上げに強く弾かれ、俺の背中が弓なりに跳ねる。その拍子に広げている股間を生徒に突き出すような形になってしまう。

「……いい反応ですね。では、性器にも塗っていきましょう。起伏が複雑な場所ですから、光を反射させた方が影の形を捉えやすくなります」

「ひゃっ、あああ……っ♡♡」

渡さんの指が、オイルをたっぷりと含んで、パイパンになったばかりの恥丘から膣口のラインをゆっくり上下に擦り上げた。オイルが馴染むほどに、そこがじんわりと、異様な熱を帯びていく。

「ん、んんうっ♡あ、つい……そこ、あづいっ……♡」



「熱く感じるんですね。もう少し奥まで塗りましょう」

(なんだって……!? 待って、このままじゃまんこに指が……っ)

抵抗しようにも、高額なバイト代に見合う仕事をやり遂げなければという責任感と、催淫オイルの熱に意識が混濁して、腕で身体を支えるのが精一杯だ。

頭が混乱している間にも、渡さんの指先がぬかるむ膣口まで入り込み、オイルを塗り込んでいく。

つぶ……♡じゅちゅ……じゅぷ……♡

「あっ!?♡あ、のっ!これって、手マンじゃ……っ!?」

「大丈夫ですよ。ナカまでオイルを塗っているだけですから。動かないでくださいね」

渡さんは微妙に噛み合っていない返答をしつつ、侵入した指を2本に増やし、容赦なく膣内をかき回し始めた。じゅちゅ……じゅぷ……♡というオイルが泡立つ卑猥な音が、静まり返ったアトリエに響き渡る。